

槐

かい

両井省二創刊

平成15年6月号

平成十五年六月一日発行 第十二巻第六号 通巻第 四四号 二五頁 二四二頁発行
平成三年五月十八日第三種郵便物認可



霞の糸

高橋将夫

大宇陀の朝しづかに山笑ふ

霞から糸を紡ぐがごときかな

春田打すませてきたる寝顔かな

をがたまの花に集まる夜天光

白髪に残る野焼の匂にて

愛憎をくるんで春のシヨールかな

月日貝でこぼこにしてつややかに

佐保姫のホームページを開きたる

はじめから壺焼の蓋開いてをる

シヴァ神のぐるり飛びかふ柳絮かな

緋緘や胎蔵界の山笑ふ

山笑ひ海笑ひ

岩月優美子

一 刷 け の 雲 あり 花 菜 畑 かな
吹 か れ 行 く 砂 の 涯 の 春 の 虹
一 本 の 松 の あ た り の 日 永 かな
こ の 辺 り む か し 海 底 青 き 踏 む
春 嵐 思 は ぬ と こ ろ 巨 船 ゐ る
シ ャ ガ ー ル の 空 三 月 の 余 白 かな
教 会 の 鐘 蛇 穴 を 出 で に け り
若 草 へ 腓 伸 ば し て を り に け り
桃 吹 く や ミ ッ シ ョ ン 校 の 前 な り し
朧 夜 の ハ ー プ の 音 色 い ま 止 み し

特別作品

いつの間にペガサスに乗る春の夢
白蝶や人魚の像の周りなり
鳩笛やトーテムポール霾れり
麗かに川底の砂吹き上がる
オフェリアの浮いてみさうな春の川
告知祭波巻き上げて来たりけり
臍に鹿尾菜たゆたふ真昼なり
鳥雲に入り海中の菩薩かな
大日や山笑ひ海笑ひをり
衣擦れの音とも風の糸桜

槐安集

市場基巳

春めくは尻さすらるるにも似たり
一服を春鶉のために惜しむなり
春の鶉の波打つ音も聴きとめし
雲あしの軽ろさに露の芽が出づる
その日まで誰にも告げず露のたう

水野恒彦

青墨の乾く速さに鶴引けり
太白のしんと未明の蕨山
鷹鳩と化し大日をうたがはず
嘴太の腋昏く翔つ芽吹山
暁の色まだとのはず落花かな

石脇みはる



椿咲く樹下にてひとのかくれけり
山焼き終へし天上の静かなり
穴を出で向き変はりたる蜥蜴かな
世尊院に春大根を抱へ入る
虎杖をしがみつスキップしてゐたり

竹内悦子

摘草の跡のまあるく荒れてをり
木の瘤の穴となりたる櫻かな
天地の音を集めて種浸し
花冷の硯の海のおぶくかな
八十八夜晒木綿の頭陀袋

木下野生

山桜うしろに人の立つてをり
くるくると巻けば寄りきて花筵
野を焼く火むかしいくさに生き残り
葱畑の葱のみんなが葱坊主
ひらひらとして三月のカレンダー

中島陽華

ひとすじの葉巻の煙菜種梅雨
髪かゆしごんずぬ玉は岩蔭に
はみ出でし足直したる涅槃かな
紅白と咲きし梅なり十時なり
越天楽目筈の露の臺なりし

延広禎一

胎内佛出でける春の霰かな
霜ふすべ神座かみくらの峯明けにける
宇宙へのパスワードは何北開く
鶏のおしくらまんぢゅう節分会
月山へ太鼓打たるる雪崩かな

栗栖恵通子

春の水喉のんど鳴らしてをりにけり
わたくしの髓のくれなゐ初桜
テポドンにきざみパセリをふつてをる
蜷の列そのどんじりに哭女
蛤や火を放ちをる御所車

槐市集

植木戴子

茎立の土膨らみし山の空
菜の花や目の高さなる湖のいろ
梅が香や齒のかけてをる鬼瓦
春風に喉撫でらるる万媚かな
おほらかに鮎子を煮る真昼かな

植松美根子

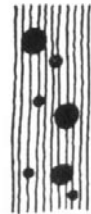
啓蟄やデイサービスを送迎車
水音のゆたかなりけり木の芽ふく
スパーへどの道行くも花なずな
交番の裏に寺あり花あしび
枝元のすでに枝垂れし梅の花

宇田喜美栄

濡れてゐる田の面を雉子の母子かな
日矢さして宙そらは浄土ぞ菜の花忌
啓蟄や畦道の泥踏んでゆく
流木に睡る鳥どち臃かな
鶏小屋に貝殻吊し黄砂かな

大島翠木

濡れ縁に前山の影雛まつり
梅の月くらりと色を濃く昇る
雨後の靄背山へ去りぬ植木市
水煙やこぞりてひらく土佐水木
辛夷咲く牧を下り来る牛の列



槐集

高橋将夫選

榛の花ふたたび仰ぎあたりけり
大地の緩びてきたり田螺和
影もまた春の長さになつてをり
こぬか雨柏落葉の音もなく
竹秋や人の匂ひのなき一間
靄靄と時流れゆくさくらかな
有明けの鯛の田麩や桃の花
春霞九絵の尾鱗もあら炊きも
鮎子のくぎ煮の頃ぞあな可しこ
環となりつつ朧夜のけむりかな
ものの芽の大音声だいおんじょうのしじまかな
右手左手風船ぬけてゆけにけり
水暮れて掌にあるさくら貝
大時計の鳴り父子草母子草
春の雲束ねかねたる枝の形

大阪 加藤 みき

枚方 雨村 敏子

中野 京子

山風やかくも紫クロツカス
犬ふぐり踏まず虚空を飛びゆけり
仏きて現に会へる花杏
麦青む田のあれば田の神座る
枯蒲の絮たえだえに東風の雨
あぶな絵を股がつてくる子安貝
樽りや空也の頭蓋はちの出でにける
二月尽ざらついてをるぼんのくぼ
入り彼岸鯉に黄道ありにける
大乘や市中金の蠅生まる
春光や死海にありし或る聖書
煉獄の空となりぬて鳥雲に
ひなまつり夜叉ヶ池よりきたる文
しののめの天地玄黄地虫出づ
冴返る阿毘羅咩欠鳩のこゑ

高松 十川たかし

宗像 南 一雄

東京 西村 純

銀河往来

高橋将夫

＝俳句とレトリック①＝

レトリックは、もともと説得、弁論術として発想、配置、修辞、

記憶を含むが、一般的には修辭法をいう。この修辭法には直喩（明喩）、隱喩（暗喩）、換喩、提喩、對義結合、逆説、緩叙法、反語法、誇張法、列叙法、對照法等、数多くある。枕詞、序詞、掛詞、縁語、本歌取りなどは日本の古典的な修辭法である。例えば、「鬼のような人に会う」というのが直喩である。「鬼に会う」といえば隱喩になる。人が隱されている。「パトカーにつかまる」は換喩。警察官がパトカーに置き換わっている。「俳句で飯は喰えない」と言えば提喩。「飯は喰えない」と「生活ができない」は意味的包含關係にある：と言った具合である。

直喩と隱喩についても少しみてみよう。散文であれば、人（A）が鬼（B）のような人柄であることを説明する情景などが叙述されるが、俳句に説明はない。それだけに、直喩の成否はAとBの關係いかんにかかっている。換言すれば、AとBの關係（的確性、意外性、面白さなど）が全てで、それ以上は何もない。

隱喩では人（A）が隱れている。散文なら、どこかで人の名前が出てくるのだが、俳句ではそれが無い。場合によっては、本物の鬼かもしれない。AはBの、そして、一句の広がりから生まれることになる。

「精神の風景」「精神の具象化」という場合、具象化された作品は隱喩（メタファー）といえよう。

影もまた春の長さになつてをり 加藤 みき
めつきりが長くなった。影の長さを全身で感じている。同じ影にも、春には春の影というのがあるのだろう。季節により影の長さが変わるなどという理屈は無用。

鮎子のくぎ煮の頃ぞあな可しこ 雨村 敏子
「鮎子のくぎ煮の頃」ということで、次に何がでるかと思えば、「あな可しこ」の一語。「くぎ煮」と「あな可しこ」のギャップをどう解説していいやら……

右手左手風船ぬけてゆきにけり 中野 京子
差し出された両手の間を風船が潜り抜けて行くさまが実にリアルに描かれている。「右手左手」に、あたふたとした様子、心の動揺が見えてくる。

犬ふぐり踏まず虚空を飛びゆけり 十川たかし
虚空を飛んで行く大いなるもの。それが、犬ふぐりは踏まなかつたという。俳諧。飛んで行ったのは、省二先生の精神か、作者の精神か。
入り彼岸鯉に黄道ありにける 南 一雄
鯉は北冥にいる巨大な魚（「莊子」）。黄道はその通り路か。なんと雄大な一句。

煉獄の空となりゐて鳥雲に 西村 純
真紅の夕空を鳥が北へ帰っていく。行く先は天国か、地獄か。煉獄に見える空も、しよせんは人の認識の範囲内でのこと。（以下略）